

## *De Anima* III.4 における付帶的知覚と「知」

渡辺邦夫

アリストテレスの心の哲学において知覚の重要性の理解が目標となっていたことは、明らかである。知覚は「自体的知覚」と「付帶的知覚」に二分され、自体的知覚は「固有知覚」と「共通知覚」に分かれる。本稿においてわたしは、人間における言語修得、学習・知性的認識の発生、道德性の高さ（道德的判断力）の養成のいずれの問題においても解釈の鍵を握る要因として、「付帶的知覚」がかれの心の哲学においてもっていた特殊な意味合いと位置を、確かめる解釈を提出したい。

### 1. *Ethica Nicomachea* (NE) VI.8, 1142a30 の *αἴσθησις* および *ἄλλο εἶδος* の解釈

アリストテレスは「本来の知覚」と考えられるものを、現代哲学における「知覚 (perception, Wahrnehmung)」より狭く捉えていた。かれはたとえば、「ディアレスの息子を見る」と表現される視覚経験の例を、色を知覚する視覚本来の知覚である「固有知覚」でもなく、運動変化、静止、形、大きさなど、複数感覚能力を経由しうが、知覚能力の本来の発揮である「共通知覚」でもなく、非本来的な「付帶的知覚」とする (*De Anima* (DA) II.6, 418a20-24; cf. III.1, 425a24-27)。「付帶的 (*κατὰ συμβεβηκός*)」の意味は、「[自体的かつ固有に知覚される] 白いものに、知覚されるものが付帶する (*συμβέβηκε*)」(418a22-23) ということであり、「付帶する」という動詞現在完了形は、がんらい独立の二経路の出来事の「暗合」を意味する (cf. *Metaphysica* (Met) Δ.30; E.2; E.3)。たまたま眼で見える「白いもの」でもあるという事実<sup>1</sup>に基づき、「知覚される」と言われる「ディアレスの息子」のような対象が、付帶的知覚対象である。「付帶的」の意味にかんするこの説明を文字通り受容すれば、われわれが日常的に「知覚の現象」と呼ぶ用例はほとんどすべて、アリストテレスの分類でいうと「付帶的知覚」になるとわたしは考える。「付帶的知覚」の意味の、この茫漠とした広がりやを考慮に入れるとき、次の NE.VI.8 で主題となる認識もまた「付帶的知覚」に分類するのが妥当であると思える。

<sup>1</sup> この点が付帶的知覚の非本来性を説明する。赤を見ることは、知覚としての一般的因果関係の中で役割を果たす。事実の知と不知により、そう見える場合もそう見えないこともあるので、「たいていのこと」でも「必然的」でもない「ディアレスの息子を見ること」という資格 (Met. Δ.30, 1025a4-6) では、同様の原因性を申し立てられない (DA.II.6, 418a23-24)。

このことゆえに、思慮深さ (*φρόνησις*) は知性 (*νοῦς*) と好対照とされるのである。なぜなら、知性はさらに溯って根拠を与えることのできない [始まりとなる「最上位」] の定義にかかわり、それに対して思慮深さは最終的なものにかかわるのだが、この最終的なものは [もはや]、学問的知識 (*ἐπιστήμη*) の対象ではなく、知覚 (*αἴσθησις*) の対象だからである。しかし知覚といっても、知覚に固有の対象を知覚するというのではなく、数学 [的推論] において最終的なものが三角形であることを知覚する場合のような知覚である。なぜなら、その [定義や原理とは反対の、具体的な個別性の] 方向に進んでも、そこで探究は停止するからである。しかし、これは思慮深さというより、むしろ知覚なのである。ただしそれは、[固有の対象を知覚する場合とは] 別の種類の知覚 (*ἄλλο εἶδος*) である<sup>2</sup>。(1142a25-30)

a28-29 の「数学において最終的なものが三角形であることを知覚する場合のような知覚」と a30 の「別の種類の知覚」とは、いかなるものだろうか？

a28-29 の「三角形の知覚」の関連性にかんするバーネットの見解は、「幾何学者が図形を分解して、たとえば三角形のような何かに到達し、三角形から、意図していた作図ないし証明を始めることができるケース」とするものである。この説明は類比が目指す二段階を的確に描写している。つまり、①複雑な幾何学図形の分解により三角形の「知覚」へと至り、②当の知覚から作図ないし証明へと至るという分節をアリストテレスは説明に使っている。しかしバーネットは、幾何学の事例から、「知覚」が文字通りには言えない (とバーネットがみなす) 思慮深さの圏内の事象には、類推を行うことはできないと考えた。かれは 1142a29-30 について ‘Mathematical intuition (*αὔτη*) is more properly called *αἴσθησις* than *φρόνησις* can be. It really is *αἴσθησις*, though not *ἡ τῶν ιδίων*, while *φρόνησις* is of course intellectual, not sensuous.’<sup>3</sup>と書いた。だが a30 の *φρόνησις* を *ἡ* で始まる従属節の主語に読むことは、無理だろう<sup>4</sup>。多数派の読解<sup>5</sup>と同様に、*φρόνησις* は *μᾶλλον ἢ* が表現する比較の「比較の対象」と解するのがよい。この場合「これは思慮深さというより、むしろ知覚なのである」という訳にせざるをえない。そして、この一節の自然な解釈は、「行動を導く道徳判断における、『最終的なもの』の認知」とは推論が含まれる思慮深さというより、非推論的で直観的な「知覚」に似たものだ、というものだろう。そして、「ただし、ここでいう『道徳的知覚』(いわゆる‘ethical perception’) は固有対象の知覚ではなく、他の種類の知覚 (*ἄλλο εἶδος*) である」とアリストテレスは補足した、と解釈できる。

1900 年のバーネット解釈以来、当該箇所解釈は進歩していない。困難は二点の問い

<sup>2</sup> 渡辺・立花訳 2016 年。

<sup>3</sup> Burnet, 274.

<sup>4</sup> Gauthier and Jolif, vol.II-2, 506 と Irwin, 248 は、Burnet, 274 の一示唆に従って、*ἡ <ἡ> φρόνησις* とテキストを修正する。つまり、テキストクリティクを厳格に行うなら、この解釈は無理である。

<sup>5</sup> Stewart, Greenwood, Apostel, Ross, Urmson, Broadie and Rowe, Crisp など。

に集約される。①（バーネットの）「数学的直観」はいかなる意味の「他の種類の知覚」なのか？ ②「道徳的知覚」は文字通りの知覚なのか、それとも「知覚」は比喩にすぎず、事実上知性的能力に属するなにかだろうか？ ——バーネットは数学的事例を知覚の例と考える方向の正しさを確信したが、問い①には答えない。他方でかれは、問い②に対しては、比喩的表現と考える。この点は以後の代表的解釈も同様で、多くが「比喩」派である<sup>6</sup>。

本稿でわたしが目指すのは、問い①の答えの確定である。わたしは「付帯的知覚」と解釈する。問い②に対し、既存解釈ほぼすべてに反対して、これも付帯的知覚であり「文字通りの知覚」と言えると答えたい。ただし問い②については解答の準備までしかできない。ここでは心の哲学の材料から、問い①と、関連する問いに答えてゆきたい。

問い①を考えるにあたり、われわれが思弁をめぐらせるしかない問いなのか、それとも、アリストテレスの分類のどこに落ちるか、テキストをもとに推測をおこなうべき問題かを、検討しなければならない。NE.VI.8 の当該箇所、とくに「数学 [的推論] において最終的なものが三角形であることを知覚する場合のような知覚 (*οἷα αἰσθανόμεθα ὅτι τὸ ἐν τοῖς μαθηματικοῖς ἔσχατον τρίγωνον*)」という一節の言い回し (a28-29) は、思弁によらず、アリストテレス自身の分類にかかわる仮説を作るべきであることを示唆する。この示唆に従うと固有知覚であることは排除され、可能性は三つになる。(1)「数学的直観」は共通知覚の一種である。(2)付帯的知覚である。(3)知覚内容を要素として含むが、それ自体知覚能力とは別の知性的な能力である。DA.II.6 と III.1-2 で固有知覚・共通知覚・付帯的知覚の三分類をすることは、(1)と(2)が候補であることを含む。他方、DA.III.3 以下の考察は、表象 (*φαντασία*) か知性 (*νοῦς*) が有力候補であるとする、(3)の材料も含むと解釈されうる。

この三者択一で正解を選び取るにあたり、NE.VI.8 のリーブの解説が、正しい方向を含む。かれは *Met.M.10, 1087a19-20* : 「見えているこの特定の色は色であるがゆえに、視覚は普遍としての色を付帯的に見る」を引いて、「瞳内部のゼリー状物質が任意の種類の知覚において受け取る形相は、見えるこの特定の色が色であるがゆえに、普遍である。だが知覚されるものは、その形相をもつ個物である」と説明し、帰納による普遍へのアクセスの力を読み取る<sup>7</sup>。わたしは、リーブが引いた a19 にある「付帯的に」に注目する。アリストテレスの語法は、リーブの「帰納」の原因(a)と結果(b)を、次のように表現してよいことを含む。

- (a) それ自体において視覚は、赤、茶、青等を見る。
- (b) 付帯的には視覚は、「普遍としての色」を見る。

<sup>6</sup> Cf. Irwin, 247f.; Broadie and Rowe, 375.

<sup>7</sup> Reeve, 204. 金子 2011 年 42-4 頁参照。なお、わたしはアリストテレスが帰納的「推論」を想定したとは解釈せず、付帯的知覚も「直観的」だと考える。

視覚にとっての「色」にせよ嗅覚にとっての「匂い」にせよ、普遍の認識がすべて、知覚として「自体的」と言われてはならず「付帶的」と言われなければならない事情は、そうした認識が視覚の能力にとっても知覚一般の力にとっても、「能力自体に織り込み済み」の営みではないからである。「色」や「匂い」や「形」を普遍として扱うことができるのは、一部の動物である人間のみであり、人間は、普遍である形の認識を幾何学の学習と研究で追求する例外的動物である。これらの普遍の認識は、かりに知覚の一種と言えとしても、知覚として「たいていのこと」でも「必然的なこと」でもないがゆえに、「付帶的」とあると言うべきであること、これが、*Met.M.10* の引用箇所でも明示されているかれの態度である。

したがって、先の三択のうち、(1)と(2)では、付帶的知覚の優位は明らかである。共通知覚は「形」と「数」も対象とするが、幾何学でいう「形」、代数学でいう「数」は共通知覚レベルの対象ではなく、知性の領域の、人間のみ遂行する学問研究と学習の対象である。したがって、*M.10* の表現を利用して(2)の「付帶的知覚」を正解とする案が有力に思える。しかし従来の解釈は、「道徳的知覚」の有無をめぐる先の問い②にかんして多数が否定的であり、(3)の「知性的認識」を有力と考えるので<sup>8</sup>、一般に問い①を検討するためにも *Met* の数学の哲学の論述だけでなく、心の哲学の中心箇所のどこかに(2)を支持する証拠となる言明を探さなければならない。続く二節でその証言と予想されるテキストを検討する。

## 2. 「付帶的知覚」と「知性」の近さと区別 : *DA.III.4, 429b12-14*

*DA* の知性論は *III.4-8* で展開されるが、*III.4, 429b14-18* においてアリストテレスは、一定対象とその本質の認識における知覚能力と知性の能力の異同について、(1)互いに完全に独立という可能性と、(2)同一機能の別様式の発揮という二つの可能性を述べる。

ところで、大きさのあるものと大きさの本質とは異なり、また水と水の本質とは異なる [中略] のであるから、肉の本質と肉そのものの識別は、異なるものによるか、あるいは同じものによるが異なった仕方であるかのいずれかである。なぜなら肉は、質料を伴わなければ存在不可能であり、シモン鼻のように、これなるもの [特定の質料] のうちに具現する これなるもの [特定の形相] だからである。だから熱さとか冷たさ、およびそれらの一定の比として肉が構成されるような諸性質を識別するのは知覚能力によるが、肉の本質 [「まさに肉であること」] を識別するのは、それとは異なるものによるのであり、それは(1)離存するものか、あるいは(2) 曲げられた線が

<sup>8</sup> Cf. Irwin, 247; Cooper, 39ff.

真っ直ぐに伸ばされたときに、以前のそれ自身のあり方に対するような関係にあるものかのいずれかによるのである (*ἀλλὰ δὲ ἴτοι χωριστῶ ἢ ὡς ἡ κεκλασμένη ἔχει πρὸς αὐτὴν ὅταν ἐκταθῆ, τὸ σαρκὶ εἶναι κρίνει.*)。 (429b10-18)

また翻って、抽象によって成立するものの場合について見るならば、直線はシモン鼻に比せられる。なぜなら直線は連続体という性格を伴うからである。だが、その本質は、直線の本質と直線とが異なるとすれば、別のものである。そのことを確証するには、直線の本質を「二という性質」として想定してみればよい。したがって、直線の本質を識別するのは、異なったものによるのか、あるいは同一なものでも別の状態にあるものによってである。だから一般的に言って、認識される事象がその質料から離存するのに応じて、同様に知性も質料から離存するのである<sup>9</sup>。(b18-22)

この議論は、知性的認識の基本となる「質料を欠く形相の認識」にかんする原則的な議論のあとに置かれている。直前の議論では、形相が対象の場合の認識が、対象の知り方も対象の本質の知り方も、知性による「形相の受容」、もしくは知性と形相の「同化」で説明でき、知性には知覚の場合の眼や耳のような身体的器官が存在しないがゆえに、知性は身体的条件に拘束される知覚と異なり対象に限定がなく (429a18-25)、身体から離存的 (*χωριστός*) である (429b5)、とアリストテレスは主張していた<sup>10</sup>。

引用した議論では、日常生活で出会う、対象と本質が別のケースの知性のはたらき方が論じられる。例となるのは大きさ、水、肉、直線である。対象は知覚されるか、(直線の場合) 直観的に把握されるかだが、本質は知性によって認識される。この明白な「ずれ」が問題となる。その回答の中心となるべき、下線を施した b16-17 の節でアリストテレスは、これらの対象の本質認識を、(1)「離存する知性」が行うのか、あるいは(2)なんらかの認知機能 (この認知機能が何かという点で、解釈は「知覚」派か「知性」派かに分かれる) が特殊な様態を取って行うのかという二つの解釈可能性、ないし事例の分類<sup>11</sup>を提出する。そして議論中重要と予想される(2)の解明のためにアリストテレスは直線の比喩を使い、「曲げられた」と「真っ直ぐに伸ばされた」を区別する。

(2)におけるこの二表現が、「知性」と「知覚」いずれの認知機能の複数様態を言うものであるのかということ、また(1)と(2)の場合分けが解釈もしくは見解の二選択肢を言うものなのか、それとも事例の場合分けを言うものなのかということの二点で、それぞれ態度が二分される。そしてこの二重の解釈の分岐の上で、諸説入り乱れた論争が起こり、解決の見通しは現時点で、立っていない。

論争は激しいが、21世紀にも生き残った解釈は二つである。(A)20世紀初頭にヒックス

<sup>9</sup> 『アリストテレス全集 7』所収の中畑正志訳を、一部変更の上お借りした。

<sup>10</sup> III.4 全体の本格的解釈に金子 2009 年がある。章冒頭箇所については、5-23 頁参照。

<sup>11</sup> Cf. Hicks, 489; Kahn, 370f.

が提唱し、ハムリンなどの解釈者が続いた解釈がある<sup>12</sup>。このグループの解釈者は、(1)(2)が二つの可能な見解を選択肢として並べたものだと解する。また、(2)で直線の比喩によって二様態が語られる認知機能とは、知覚であると考え<sup>13</sup>。ただし、その(2)で申し立てられる可能性とは「たんに可能な見解」なのであり、そのような可能性にとどまると解釈される。この解釈では、アリストテレスは III.4 でも、以下のいくつかの章でも、結局、(2)ではなく、(1)の「知性の下位能力からの離存」を正式見解として提唱している、と一致して考えている。2019年現在でも、この解釈が主流派であることは変わらない。わたしは以下において、主流派解釈に賛成しつつ、この派の主張に反して(2)の一定の重要性をも主張できる方向を探りたいと考える。

これに対し、(B)1992年論文でカーンが復活させた、テミスティオスの古注を起源とする解釈がある。この両者は、(1)(2)が事例の場合分けを「…か、…か (ἤτοι...ἤ...)」の二者択一で言っていると解した上で、(2)で問題となる二様態の認知機能は知性であると解する。より詳しくは二選択肢を、知性単独の認知の場合((1)「離存するもの」と、知性と感覚が連帯的な関係をもって共同的に認知を行う場合((2)「曲げられた線が真っ直ぐに伸ばされたときに、以前のそれ自身のあり方に対するような関係にある」と)の二つであると解釈する。この派の解釈として金子<sup>14</sup>が続いた。わたしは以下で B 解釈に反対の議論を遂行するが、(2)の重要性を、わたしもこの派の解釈とは別の方向で押さえたいと考える。

A 解釈か B 解釈かを検討するとき、初めには二見解の選択の問題か、それとも二種類事例の分類の問題かを考えることが、適切である<sup>15</sup>。

ヒックスは II.5, 417b12-15 中の ‘ἤτοι...ἤ...’ が紛れなく二見解の選択の問題を述べている章句であったことを、かれの解釈の傍証として挙げている<sup>16</sup>。たしかに語法的には、この III.4 でもヒックスの指摘どおり、A 解釈のほうが自然である。しかし、たとえこのポイントを措くとしても、わたしには、内容の観点で B 解釈は、III.4 の置かれた文脈的な位置からみて無理だと思われる。

第一に、アリストテレスは III 巻のここに至る、知覚・表象・知性を順次主題とする内容豊富な議論において、プラトン『テアイテトス』第一部最終議論の次のやり取りに端を発する一連の問題を追究している。

<sup>12</sup> Hicks, 489-491; Hamlyn, 137f.

<sup>13</sup> Polansky, 449f. は二見解の提示という基本線ではヒックスに従いつつ、(2)について、「知覚の二様態」と「知性の二様態」両方を同等の資格のものとして考察している。しかし見解の二選択肢とする場合、知覚の二様態と考えるほうが、III.4 の文脈にはいっそうよく沿った解釈である。23 頁参照。

<sup>14</sup> 金子 2009 年 23-30 頁。

<sup>15</sup> カーンは、ヒックスが(2)を知覚の二様態としたことは「経験主義的前提」によると推測するが (Kahn, 372, n.24)、ヒックスは (たしかに経験主義的な、後の Modrak, 118 および n.18 とは、違って) 一見解として(2)を解釈したため(2)の妥当性には荷担していない。この推測は的外れである。

<sup>16</sup> Hicks, 489.

ソクラテス …しかし、それではすべてにおいて共通なもの、〔音声と色の〕この両者において共通なもの (τὸ τ' ἐπὶ πᾶσι κοινὸν καὶ τὸ ἐπὶ τούτοις) をきみに明らかにするのは、何を通じての能力だろう? 「共通なもの」とはつまり、「有る」ときみが呼ぶもの、「ありもしない」と呼ぶもの、そしてさらには、この両者についてわれわれが質問した事柄のことだが。

これらすべてに対し、われわれに属する知覚の力がそれぞれのものを知覚するのはそれを通じてであるようないかなる「道具」を、きみは申し立てることができるだろうか?

[中略]

テアイテトス しかし、神に誓って、ソクラテス、元来そのようなものなどなく、先のものたちに対してあったようには、これらには固有の「道具」はそもそもないのであって、魂が自己自身を通じて、すべてについてそうした共通なものを考察しているように、わたしには思えますが (αὐτὴ δι' αὐτῆς ἡ ψυχὴ τὰ κοινὰ μοι φαίνεται περὶ πάντων ἐπισκοπεῖν)。このこと以外、このわたしには答えることができません。

ソクラテス うーん、きみはじつに美しいよ、テアイテトス! テオドロスが言ったようにきみが醜いなどということは、ないね。なぜなら、美しく語る者は、美にして善なのだからね。

また、美のことだけではなく、きみはきわめて長大な議論からわたしを解放してくれて、わたしに親切なことをしてくれもした。それは、魂が或るものを、自己自身を通じて考察し、また別のものを、身体に属する諸能力を通じて考察する、というようにきみにあらわれるとすることだが。なぜなら、これこそわたし自身にもずっとそう思っていることだったのだから。そして、わたしはきみにもそう思えるよう、望んでいるのだ。

テアイテトス ええ、そしてわたしにはそう思えるのです<sup>17</sup>。(185C4-186A1)

下線を引いた二箇所は、この論述がプラトン自身の固い個人的信念を反映しているということの表明でもあるが、同時に、哲学的議論の未開拓の「宝庫」がここにあるという趣旨の示唆でもある。『テアイテトス』発表のころアカデメイアに入学した、哲学の独創的発想をもつ若きアリストテレスにとって、最重要の一つの問題領域を、プラトン自ら明確にしてくれたと映るような、「素晴らしいヒント」だったに違いない。

事実、かれは III.1 において、複数感覚 (ないし五感のすべて) にまたがって経験ないし認識される「共通の」対象には、知覚の圏内の自体的対象に数えられるもの (「共通知覚対象 (425a14-15: οὐδὲ τῶν κοινῶν ... ὧν ἐκάστη αἰσθήσει αἰσθανόμεθα κατὰ συμβεβηκός; a27: τῶν δὲ κοινῶν ἤδη ἔχομεν αἴσθησιν κοινήν)」の運動、静止、形、一、数、量など) も

<sup>17</sup> 訳は渡辺訳 2019 年。

あることを論点として提出する (425a14-b11)。次に III.2 において、『テアイテトス』のプラトンならば議論ぬきに (「考え」や「判断」と訳せる)「ドクサ」の領域の問題として扱うはずの<sup>18</sup>「知覚の認識」という現象 (「自分が見たり聞いたりしていることの認識」の現象)を、アリストテレスは知覚による認識だと断定した上で (425b12-13)、視覚の場合に「視覚の認識」は「視覚の視覚」であると論じている (b17)。そしてさらに、知覚から表象へ話題が転換した III.3 においても、『テアイテトス』の「知覚」と「魂単独の経験」の簡略な二分法に対するアリストテレスの異論は続き、私見では異論としての最高潮にまで達している。すなわち、かれは、プラトンが『テアイテトス』の二分法に則って『ソフィスト』および『ティマイオス』で定めた「表象・ファンタシア」の定義に対して、それぞれの定式を引用した上で反論し、表象は「言語 (λόγος)<sup>19</sup>以後のドクサ」(428a22-24) よりも前の、他の動物と共有する認知レベルとして規定されなければならないがゆえに (a24: τοίνυν) プラトンのファンタシア理解を採用することはできないと主張する (428a24-b1)。プラトンはファンタシアを『ソフィスト』264A4 で「知覚を通じた (δι' αἰσθήσεως) ドクサ」と規定し、『ティマイオス』52A7 では「知覚を伴うドクサ (δόξη μετ' αἰσθήσεως)」と規定したが、アリストテレスが III.3, 428a25 でこの両方の文言を文字通り引用した上で批判しているという事実は、かれが知覚論の III.1, III.2 に引き続き、『テアイテトス』流の二分法について、ここでも自覚的に検討を加えているということの意味する。『ソフィスト』のファンタシア規定は、ファンタシアがドクサの領分における経験に属し、単に感覚的契機を含むにすぎないものであるがゆえに、ロゴスとドクサ一般と同じく真偽を言えるものであるという主張の脈絡の規定であり、『テアイテトス』第一部最終議論を前提している。『ティマイオス』の文脈もまた、同様に魂の単独認知機能の一環として感覚的契機を導入する話の文脈にあるから、アリストテレスにとって同じ標的の議論になっている。

つまりアリストテレスは、「魂独自の知性的経験」の導入を、プラトン『テアイテトス』よりは慎重に、やや遅らせる方向で議論しているのである。したがって、DA.III.4 の知性論の始まりにおいて今度は「知性の離存性」を強調するときのかれは、知性的経験の境界を最終的に議論によって定めることの責任を、同時に引き受けているとみなさなければならない。この観点からみると、テミスティオスとカーンのB解釈は、論拠が薄弱である。かれらの(2)は知性と知覚が連帯する局面の経験とされるが、アリストテレスはまさにそのような経験としての「プラトンの意味でのファンタシア」の存在を、直前の III.3 で、典拠の対話篇を特定した上できっぱり拒絶したばかりだからである<sup>20</sup>。「討議的な

<sup>18</sup> 『テアイテトス』第一部最終議論では「知覚」を、知覚される特徴の意識の経験に限定して解釈することが適切である、とわたしは考える。Kanayama, 60-74; Burnyeat, 64; 渡辺訳 2019 年 407-17 頁参照。

<sup>19</sup> 「言語」という訳は、Wedin, 147-59 と中畑 2011 年 232 頁の解釈に負う。

<sup>20</sup> 金子 2009 年 24-34 頁は、知性の「単純モード」と(知覚ないし表象と協同する)「複合モード」の区別にアリストテレスが荷担したと解釈する。しかし A 解釈のもとで、III.4 内部に区

手続きに則った自らの立場の確立」にかかわる常識から言って、そうした経験を次章で正当化なしに承認することは、許容される態度ではない。B 解釈を採用することはできず、アリストテレスが自身の知性論の根本的態度決定に向かっているという含みをもつ、A 解釈を採用するしかない。そして(2)で問題となる二様態は、III.1-3 で知覚経験の予想外の豊かさを論点としたアリストテレスの論調から見て、知覚の二様態であるのに違いない。かれはいったん『テアイテトス』における「議論の詰めの欠如」を補ったあと、III.4 の知性論の舞台の始まりにおいては、そうした補完が反知性主義や経験主義に向かうものではなく、より洗練され、より穏当な知性主義の完成のためであったと示さなければならない。そのためにかれは、解釈の重要な選択肢として(2)を挙げつつ、結論としては(1)に軍配をあげている——このようにみなすべきである。

なお、最古の逐語的解説ではあっても、このテミスティオスの説明には、用心が必要である。かれは(2)の読みとして知性と知覚の協同を提唱する際、プラトンを引いている。かれは比喩の「真っ直ぐ」を『ティマイオス』37B7 の *ὀρθός* に関係づけ、「曲げられた」を同じく 37C2 の *εὐτροχος* と対応する事態とみる<sup>21</sup>。しかし 37B6-8 は直前の III.3 においてアリストテレスが批判した 52A7 における「知覚判断的なファンタシア理解」と同じ考えを述べる箇所なので、アリストテレスがこの趣旨で線の比喩を使用したことはありえない。

参照間違いを正せたのは、ポランスキーの注である。かれは「魂の軌道」(44B2)を述べる『ティマイオス』44A-C への言及だと推測し、「感覚されうる諸事物にかかわる知性は曲がっているのに対し、本質を知るようになるとき、知性は真っ直ぐになる」と説明して、魂がいかにして健全になれるかという『ティマイオス』の論点が背景にあると示唆した<sup>22</sup>。この説明は、DA の「曲がっている」状態を教育が必要な段階と捉え、「真っ直ぐな」状態を知性的で自然に合致した状態と考える点で、より安全である。

しかし、その一方でアリストテレスが、『ティマイオス』に特徴的な「知性の物語」として啓蒙過程を描写しているとするのは、論脈に合わない。なによりかれはここで、

---

別の痕跡はない。金子の 2 モードも、Shields, 306f. の *formal kinds/snub kinds* の区別も、かれがここで荷担する区別とは思えない。アリストテレスは、「知性機能にかんするアポリア」を提出する準備のためにパイノメナを挙げ、後に、帰結となる二つのアポリア (429b22-29: 「単純な知性ならば、認識することができない」、「知性は、知性認識されえない」) を提出し、それを「書板の比喩」により解く、とわたしは解釈する。この解釈を、稿を改めて詳論するが、一つのパイノメナは①知性にかんする「対象との単純な同一」を言う考えであり、第二のパイノメナが、②「日常的な肉や水などの対象において単に『知性がそれと同一』とは言えない」という考えだと解する。①と②が確定的「区別」をなすという含みは、テキストの言語からは窺えない。むしろ①と②の、アポリアを生むパイノメナ間の「食い違い」は、章冒頭の「世界の自然的根本特徴」による、アナクサゴラス説的な「知性の記述」から、章末の「自然言語が与える多様な特徴」の承認に基づく「知性の記述」への移行によりアポリアに答えることを要請する、とわたしは考える。なお、金子は III.7 と III.8 では「複合モード」のみに *φάντασμα* が必要とされると解釈する (30-35 頁) が、III.8, 432a8-9 を見落としている。そこでは理論活動を含む全知性認識に表象像の必要性が認められる。

<sup>21</sup> Themistius, 96. 27-30; cf. Todd (tr.), 186, n.14.

<sup>22</sup> Polansky, 450 n.23. Cf. 445-51.

(1)の離存するものとしての知性とは別の選択肢として(2)の内容を説明しなければならない。つまり、選択肢の内容は、「知性的」なはたらきを知覚が、積極的に代替できるという論点でなければならず、「知性」とされる人間に特有の認知は、独立の知性「機能」というより、むしろ「知覚が、人間の学習で発展した、その延長上の成果」で尽くされることが、論点だろう。それゆえ、「人間の場合、可能態の知性(=知覚)から、目的論的過程としての学習により『知性』が発生する」という路線が、(1)とは別の(2)の内容としてまず押さえられるべきである。

引用中二回の「シモン鼻」への言及(429b14, b18-19)も、この点を補強する。「シモンの」という形容詞は、鼻の形状専用の形容詞である。そこで、これが「くぼみの大きな鼻」という、ほぼ同義の表現にあらわれる「くぼみの大きな」という形容詞だったならば、質料としての鼻への言及ぬきに形状を表現できたのだが、その種の事柄とは対照的に、「『シモンの』であるとは何か?」との本質への問いに対しては、鼻という、形状が指定する「質料」への言及を、必ず含まなければならない(III.7, 431b12-17; *Met.* Z.5; *Phys.* I.3, 181b22-23; II.2, 194a1-7)。さらにこの点は、アリストテレスが「肉」と同水準と思われる感情等の魂のはたらきの定義を「質料に言及した説明規定(I.1, 403a25: *λόγοι ἐνυλοῖ*)」としたことと、魂の研究を(非受動的知性以外)自然学者の領分としたこと(403b7-12)に直結する主張である。それゆえ、(2)は知性を知覚の「完成形」として捉える、という選択だろう。

したがって、もしアリストテレスが『ティマイオス』44A-Cの叙述を応用している、とするポランスキーの推測が正しいとするなら<sup>23</sup>、かれは一方でプラトンから、「学習」という主題と、主題を表す「軌道」の形の「全自然との合致」/「知性以前段階の迂遠な『対象』把握」の対立イメージを借りつつ、論述の精神においては、借用元のプラトンは異なる方向へスライドさせたとみるのがよい。そう考えるとき、まず肉の本質は「質料に言及した説明規定」によってのみ定義でき、直線の本質でさえ(直線の連続体としての性格を説明するための)「知性的に認知される質料」(cf. *Met.* Z.10, 1036a9-10)への言及ぬきには定義できないとする解釈が、引用文の内容から、もっとも見込みがある。次に、最終文における「だから一般的に言って、認識される事象がその質料から離存するのに応じて(*ὡς χωριστὰ*)、同様に(*οὕτως*)知性も質料から離存するのである」(429b21-22)とする結論では、質料からの「離存可能性の程度」における、対象と認知機能の対応の主張

<sup>23</sup> 同等効力の別の可能性は、金子 2009 年注 33 のように、アリストテレスが III.2, 427a9-16 などで導入した、自分自身の創案した屈折した線のイメージをここで応用している、とするものである。たとえば、知覚が純粋に知覚レベルで「対象」にかかわろうとするときには、III.2 のように、黄色と苦みを感じる共通知覚機能において付帶的・一時的に「胆汁にあたる対象」を知覚する「境界点」も、「胆汁」にあたる付帶的で一回それとして感知される「対象」に対応する「境界点」も、ともに「一つ」にも「二つ」にも数えられる(cf. III.7, 431a20-b1)のに対し、III.6 末尾 430b27-30 で描写される「対象の本質の把握」が起こって知覚が知性化した時には、「真っ直ぐな」状態で、(曖昧さなく「一つ」の)主体と(曖昧さなく「一つ」の)対象として結ばれると考えているのかもしれない。

が提出される。ここに、知性が「身体」から離存可能か否か、また、完全に、もしくは存在論的に離存可能ではない場合でも、どの程度離存可能かという問いが理解されている。この問いに関連性をもつ「質料」とは、知性による思考が可能になるための、知覚と表象を内蔵する質料・身体である。これを内蔵する動物身体のみ条件をクリアしている。この箇所「離存」は最低限、人間については、知性が知覚と独立の機能か否かの問題だが、それ以上に、知覚が栄養摂取・生殖能力から独立であるということの意味を超えた、「知性としての知性」の身体からの離存性の意味が含まれる<sup>24</sup>。また、「知覚能力」からの離存のみが主題化されているが、これは「知覚」を（原始的動物でない）「多くの動物の知覚」として、表象内容を保存する力を含む広義で捉えたためである。

それゆえ、下線部の意味は次のようになる。肉の本質の認識が、選択肢(1)のように知覚から離存しているというわけではないとする。このとき(2)に進む。肉の研究という主題の学習を終えた段階の「知性化した知覚」（「真っ直ぐに伸ばされたとき」の曲げられた線）が、すでにそなわっている知覚能力（「以前のそれ自身のあり方」）に対して——つまり、肉を構成する、「熱さ」や「冷たさ」のような特徴を知覚する生来の知覚に対して——付帯的知覚能力<sup>25</sup>を表す「知性」として関係しながら「知性」機能を体現すると言えるようになる。また、人間特有の学習を経たこの「知性」（＝特殊な知覚能力）によって、定義にかかわる「質料」の認知をも内に含むような肉の本質の「認識」が遂行される、とすればよい。以上の解釈では、(1)が知性を離存的な能力（以下、この離存性を「端的な独立性」と表現する）とみなす態度の表現であり、(2)は、知性が「機能の独立存在の問題」への一答案として「知覚に全面的に依存する」と考え、知性とは特殊で付帯的な知覚にほかならないと想定する態度を表す。

ただし、この二つの選択肢をこの箇所では挙げながらアリストテレスは、*DA* のこれ以後の論考において選択肢(2)を、まともな可能性として一度も考慮しない<sup>26</sup>。栄養摂取／生殖能力（植物）・知覚能力（動物）・知性（人間）という主要三階層の生命階層説で一貫している。これは、知性主義者の首尾一貫性という観点からすれば、「問題的」とまでは言えない態度だが、われわれがこれまで見てきた、すぐれた知性主義の定式のためにかれが『テアイテトス』第一部最終議論に対して行ってきた積極的異論の「仕上げ」という観点からは、極度に不十分な態度であると言わざるをえない。

<sup>24</sup> III.4, 429a10-13 中の譲歩節は、III.5 以前では「離存」の観点が未決に留まることを示唆する。Corcilius and Gregoric, 90 は、無限定の‘χωριστόν’は「存在論的離存」(cf. Fine, 34-45, esp.35f.) のことだと主張する。III.5 の「非受動的知性」(430a15-18) についてはそう言うが、生命階層のうちで生きる人間のまるごとの知性の場合には、この「原則」は適用できない。III.4 の「知性の離存」は、身体から離存するがゆえに、定義的「離存」よりは強いが、非受動的知性のように存在論的な離存を言えるほどは強くない「中間の段階」と言うことが、適切である。

<sup>25</sup> 金子 2011 年 36 頁参照。熱・冷は触覚固有対象だが、熱・冷の比である「肉であること」の判別は、「熱・冷を判別する感覚内容に『肉である』が付帯するという形式を取る」ので、付帯的知覚による。

<sup>26</sup> Cf. Shields, 307. Shields は(2)が些末だと言うが、そうは思えない。次節参照。

それゆえわれわれは、引用箇所において展開された議論がもつ意義から考えて、新しい知性主義の完成のために、当該議論中で提出される選択肢(2)の趣旨をなんらか活用すべき文脈が、他著作には存在すると推測できる。そして、ここの「特殊な知覚である『知性』」の「知覚としての側面」とは、固有知覚でも共通知覚でもない付帯的知覚のことである。しかもそれは、人間の(個と普遍を問わず)「対象」を知覚し、学習の結果をも知覚する重要知覚なので、この推測が成り立てば、小論冒頭で問題にした *NE.VI.8* と *Met.M.10* に出現する「知覚」(およびその類いの語)の使用の最良の正当化となるはずである。

私見では、選択肢(2)のこのような想定される意義は、*DA* よりも視野を広く取り、*De Sensu(Sens)*にまで検討を拡大すれば、確証される。

### 3. *Sens.1* の聴覚と、言語修得および学習との偶然的で重大な関係

*Sens.1* は、聴覚の特殊で重大な意義にかんする、次の考察を章末に含む。

…しかし他方で、知性をもっている動物にとって遠方の感覚がそなわる理由は、「『よく』ということ」である。というのもこれらの感覚こそ、知性認識の対象と行為の対象にかんする知性 (*φρόνησις*) が発生する源となるたくさんの差異の情報を、動物自身に伝えてくれるものだからである。そして、そうした差異そのもののうち生活に必要な情報にかんしては、それ自体において視覚がよりすぐれている。しかし、知性のためには (*πρὸς δὲ νοῦν*)、付帯的な仕方においてではあるが聴覚のほうが、よりすぐれている。[中略] 聴覚は音のもろもろの差異を伝えるにすぎないが、少数の動物において声の諸差異をも伝える。しかし聴覚は、付帯的には知性のために、最大の貢献をする (*κατὰ συμβεβηκὸς δὲ πρὸς φρόνησιν ἢ ἀκοή πλείστον συμβάλλεται μέρος*)。なぜなら、言明 (*λόγος*) が聞きとられるものでありつつ、学習の原因だからである。ただし、そのことは言明それ自体に基づくことではなく、単に付帯的なことにすぎない。つまり、言明は複数の語から成り立つものであり、語が何かを規約により表示する記号 (*σύμβολον*) なのである。それゆえ、生まれつきいずれかの感覚を欠く人のうち、盲目の人のほうが、口がきけず聞こえない人よりも知性がすぐれている。(437a1-17)

この引用中下線を施した 437a5, a11, a13-14 の三箇所ではアリストテレスは、「付帯的」という言葉を使用する。初め二回は「付帯的・知覚」という修飾ではなく、聴覚の「付帯的・長所/貢献」のたぐいの別の修飾関係における使用である。しかし、この表面的相違は、a5 と a11 における二箇所の当のフレーズの出現も、アリストテレスのここの議論全体

も、人間の場合の聴覚に主に関係する付帯的知覚を正面から取り上げ、主題にするものだとする解釈の妨げにはならない。言明と、言語修得に基づくあらゆる学習の成果の知覚は、聴覚であれ視覚であれ、特定感覚にも、知覚一般にも織り込み済みの能力ではなく「付帯的知覚」に属することを、この議論は自明視し、その上で前提していると思われる。他方、437a13-14 における第三の「付帯的」導入のポイントはさしあたり、語が規約に基づく意味表示をもつ記号 (*σύμβολον*) であるため、言明と言語の知性への貢献は「付帯的なもの」にとどまる、という論点にある。しかし同じ「付帯性」で、言語・言明に深く関係する聴覚もまた知性のために、「付帯的に」貢献をするという点を表現できる<sup>27</sup>。さらに、規約による記号としての語は、「知性認識の対象 (νοητά)」(437a2-3) を表す記号として、そのかぎりで間接的に知性および学習全般に貢献する以上、聴覚に適用されうるこの第三の「付帯的」の説明は、a5, a11 の出現と連動して、「付帯的」知覚の究極の意味をも解明している。つまり、あらゆる知的学習以前に言語修得がなされ、人間は修得以後「言語の意味論的機能」の思考活動への依存と、思考能力発展の言語への依存の「有意味な循環」<sup>28</sup>のもとで生きる。それゆえ言語修得後に起こり知性と学習が絡む種類のすべての知覚は、付帯的知覚となるのである。

以上の *Sens. 1* の主張は、元に戻って言えば、前節で主題にした *DA.III.4, 429b12-14* をめぐる解釈問題の、いわばすべての側面に照明を与えるものである。

第一に、アリストテレスが、*III.4* において選択肢(1)で表現していた、知性の知覚からの機能としての端的な独立性のほうをその後の *DA* の論述で事実上前提し、「単に知覚の延長上にある機能」という選択肢(2)の知性解釈を無視した態度は、かれのこの主張によって完全に正当化されている。実際、人間において聴覚を主舞台として言語修得が起こるために、「付帯性」が介入する。知覚と知性が互いにもつのは、この程度に断絶含みの「付帯性の関係」の非本質的な関連性だから、それで知覚を本質的契機として知性の機能を記述することが不可能だったのである。

*DA.III.4* の後続箇所、知性の説明として標準と思える「心の構造」の記述がある。

…知性は、可能態においては或る意味で知性認識されうるものであるが、しかし現実態においては知性認識する以前には何ものでもない、ということだったのでないか。そしてその可能態におけるあり方は、現実態としてはそのなかに何一つ書き記されていない書板の状態に相当する (*οὕτως ὡς περ ἐν γραμματείῳ ᾧ μηδὲν ἐνυπάρχει ἐντελεχεία γεγραμμένον*) が、まさにそれこそが知性について生じる事態なのである。(429b29-430a2)

<sup>27</sup> 解釈として、意味は規約的にのみ言語に結びつくとの否定的含みを言う解釈 (Ross, 185) を採らず、言語が規約的符号であるがゆえに思考の発達にとって本質的な役割を果たすとの積極的な含みを読む読解 (中畑 2000 年 46-9 頁) を採る。

<sup>28</sup> 中畑 2000 年 48 頁。中畑 2011 年 233-4 頁も参照。

ここの論述の強調は、知性（*νοῦς*）が知性認識以前にはまったく何ものでもない（*οὐδέν/μηδέν*）ことに置かれている。その点が、知性は書板のようにすべてが書き込まれるものであり、この意味で「あらゆることを知性認識することができる」ことの保証となる。知性の可塑性<sup>29</sup>がここの論点である。可塑性が全面的であり人間本性に根差すために、知性があらかじめ現実態において積極的な本質規定をもつことがあってはならない。これは言葉としては、知性とは「混交していないものである」とするアナクサゴラス説などを裏書きした III.4 冒頭部（429a18-25）の再現だが、その後知覚機能に知性を比定し、その上前述の選択肢(1) (2)の提示を行った後の、章末尾のこの位置におけるこの厳密な再確認は、「知性機能を、知覚機能からの単なる延長上で説明すること」の完全な清算という役割をも担うと解せる。それゆえ選択肢(2)でなく、(1)が正しいのである。

結果として確立した知性の「端的な独立性」は、アリストテレス的な心の哲学の最終公式声明である。したがって、III.4 が最終的にそこに結論を見だし、次の III.5 で、知性ないし知性を構成するなんらかの要因が、端的な独立性を超えてさらに存在論的離存性までもつか、という点に検討が及ぶことは、アリストテレス知性論のもっとも興味深い主張のラインであるといえる。そして、*Sens.* 1 はこの端的な独立性を別の側面から、つまり「人間における、知覚から出発し、言語を介する、知性の生成」にかかわる議論を遂行することを通じて、内容的に補完し、正当化している。それだけでなく、III.4 ではなぜか明示的に語られない選択肢(2)の破棄は、「付带的」の三度の出現により、ここでは、いかなる読者にも自明と理解されるはずである。

第二に、*Sens.* 1 の章末引用箇所は、選択肢(1)をわれわれが受容した上でなら、知覚が知性の成立と存在に寄与する積極的な仕方のほうも十分に描写していると解せる。

この章の冒頭部は *DA* と、*Sens* を第一研究とする *Parva Naturalia* (*PN*) との、接続の仕方の説明になっていた。その箇所でアリストテレスは、「魂それ自体」と「魂の各能力」について規定した *DA* の論述を前提にしながら 関連する問題を研究すること（436a5）、「魂も身体も、共通に関係する営み（*κοινὰ τῆς τε ψυχῆς ὄντα καὶ τοῦ σώματος*）」（436a7-8）<sup>30</sup>を以下の *PN* で主題にするが、この主題にかかわる現象はすべて知覚との

<sup>29</sup> Cf. Shields, 294.

<sup>30</sup> アレクサンドロスは *DA* と、*Sens* および *PN* との関係をめぐり、*Sens.*1, 436a1: 「魂についてはそれ自体として第一に規定された」に関連して、「第一のこと」に続く事柄の二種類の解釈候補を述べている。①「続く事柄」とは魂の諸能力の考察（a1-2）である（*Alex.*, 3. 8-15）。②動物と生命をもつすべてのものについての考察（a2-4）である。つまり、「*DA* では、魂が身体と共に『存在』をなしもするのに、その身体についても考察する、ということがなかった（*ὅτι μὴ καὶ περὶ τοῦ σώματος, σὺν ᾧ τῇ ψυχῇ καὶ τὸ εἶναι*）。実際、そのゆえにアリストテレスは今、感覚器官についても論ずることになるのである」（3. 15-17）。多くの論者は *DA* でも感覚器官のはたらきの議論がなされていたことを主な理由に、①を選択する（Johansen, 146ff.は、『テアイテス』を下敷きに両著作の分業がなされたとするが、これは無理だろう）。アレクサンドロスの上掲最終文が、単純ミスなのだろう。身体から離存しない知覚の議論は *DA* でも、機能に貢献する限りの器官の議論を必然的に含み、離存的な知性の *DA* における説明は身体側

結びつきをもっていて、それゆえ「心身共通」という特徴を帯びること（436b1-8）、以上二点を明言する。本節冒頭で引用したこの章末尾の 437a1-17 は、明らかに、知性認識という人間特有の活動における「心身共通」の要素を論じる、という文脈的な意義を担っている。そして、ここが DA.III.4 において一度提出されただけであっさり捨てられた選択肢(2)の、別の論脈における見直しの議論にもなっていると解釈できる。

まず、DA の知性論内部で、人間が表象内容（*φάντασμα*）なしには知性認識できないという論点が提出されていた（III.7, 431a16-17, b2; III.8, 432a8-9）。これは知性の形相面のなにかではなく、明確に質料的な要因といえる。知性という魂の能力ないし部分にとって、形相としての機能が必要とする質料＝身体的装備があり、それは、知覚能力の上に成立する表象のはたらきをもたらす、豊かな表象内容である。人間が過去の全経験の上でこれを自在に操れるということが、知性が「現実態においては知性認識する以前には何のものでもない」（III.4, 429b31）にもかかわらず、認識のもっとも十全なはたらきになれる秘密である。つまり、「現実態としてはそのなかに何一つ書き記されていない書板」を魂にもつということは、「書き記されていない」で「書き込み可能」であることのために、人間の場合、機能的に高度に発達した身体を要することである。選択肢(2)が表現した、形相（ないし認知機能）同士としての知性への知覚の貢献は、一度そのかぎりでも否認された。しかし、人間において、「知性の質料」のための「仮定的必然性」（cf. *Phys.* II.9）もまた存在する。この必然性条件を、表象内容を提供する知覚と表象が満たす。そこで、アリストテレスはこの条件自体を、「共通の要因」を論じ、「動物性を規定する知覚」をその中心主題とする *Sens* に場所を移して論じなければならなかったのだろう。こうして、1章の章末で人間固有の付帶的知覚に言語および知性認識が結びつくことは、質料（身体要因）に対する形相（心の機能としての知性）の関係の問題の扱いとしては十分に正当であり、知性と知覚の積極的連携が、形相面の研究の DA とは別の心身関係論の視角で理論的に承認され、正当化されたのである<sup>31</sup>。

本稿で初めに問題にした「三角形を見ること」などの「人間知性と学問の領域の知覚」の問題も、心身関係を考察できる文脈の話として扱えば解決がみえてくる。「肉」は、「肉の本質」と近似的に同一である<sup>32</sup>。人が知覚するこの肉には質料が含まれ、普遍としての肉にも知性的に認知される質料が含まれる。肉としての肉の知覚は、人間が言語を修得して「肉」という語彙をもつことに由来する。究極的にはこの理由で、それは付帶的知

---

の条件を無視したものになるという機能間の相違を考えれば、ギリシア語の読みとして自然な②を選ぶべきである。

<sup>31</sup> DA と PN の論脈の峻別により、魂の機能群は順序系列をなし（II.2, 413a26-b10; II.3, 414b29: *ἐφεξῆς*）、そうした項には共通定義がないとのアリストテレスの一般的主張（cf. *Met.*B.3, 999a6-10; *NE.*I.6, 1096a19-23; *EE.*I.8, 1218a1-8; *Pol.*III.1, 1275a34-38）から導ける、魂の一般定義の価値の相対的な低さの論点（cf. Philoponus, 257. 7-12）も、「任意の機能、たとえば知覚は、高次の機能、たとえば知性の『質料』と数えられうるために、原理的に言えば、これらの共通定義を作ることはできない」というように、方法論の厳格な趣旨どおり解釈できる。

<sup>32</sup> Cf. *Met.* H.6, 1045a14-b7.

覚である。「肉の本質」は知性の対象だが、このような本質には、「肉である」ための仮定的必然性が伴う。この必然性条件の検討には、人間固有の付帯的知覚を駆使する必要がある。他方、「三角形」は個別の三角形であっても、知覚されずに知性認識される。ただし、こうした延長をもつ図形は知性的に認知される質料をもち、われわれはノートに描かれた三角形を、付帯的知覚によって三角形一般として見る。アリストテレスが *NE.VI.8* で「知覚」と言ったのは、数学研究の現場で図示された三角形の、この文字通りの知覚だろう。これは付帯的知覚であり、*Sens. 1* の論述では言語修得と幾何学の学習の成果として人間がもつ知覚である。同章冒頭部では、「いかなる営みは、一定の生物や動物に固有なのか? (*τίνας εἰσὶν ἴδιαι ... πράξεις αὐτῶν*)」という問い (436a2-5) が *DA* では問われず、*PN* 等で研究されるべき問いであるともされる。「人間固有の知覚」という意味の、それに応じた外延の付帯的知覚には、言語修得と学習により、心の能力とともに対応する身体的能力をも拡張していくような「ユニークな発展性のある生物の知覚」という条件が伴うわけである。

——以上により、*Sens. 1* において、われわれが「知覚言明」と認めるものは、アリストテレスによってもほぼ同じ範囲で承認されていたこと、ただし大部分付帯的とされたこと、この二点にかかわる事情が明らかになった。もともと、知識の各領域の学問を立ち上げる際言葉の慣用を含む「あらわれ」を重視したかれが、知覚の範囲にかんしてのみ、われわれの日常的言語慣習に対し暴力的なまでに狭量にふるまうといったことを、信じてはいけなかったのである<sup>3334</sup>。

## 後記

ギリシャ哲学セミナー席上でいただいた多くのご質問・ご意見に感謝する。線の比喻にかんする金子善彦氏のご提案は興味深いアイデアだったので、注 23 に反映させた。栗原裕次氏と中畑正志氏からは、429b16-17 の(2)は知性の様態と考えるべきだとのことをご意見をいただいた。これに対し、説明不足があった第 2 節を大幅に書き換え、知覚の二様態と解する私見を補強して改善を試みた。

「付帯性」があまりに茫漠としているなど、いただいた他のコメントについては、今後の研究で答えたい。

<sup>33</sup> 「道徳的知覚」をめぐる 2 頁の問い②の答えも「付帯的知覚」だと考える。これに関連する *DA.III.10* 冒頭部は、過度に知性主義的に解釈されなくてよい。渡辺 2017 年参照。

<sup>34</sup> 本稿は 2014-17 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (C)) 「心身の難問に向かうものとしてのアリストテレス哲学の研究」(課題番号 26370005) の研究成果の一部である。

## 文献表

- Alexander Aphrodisiensis, *In Librum De sensu commentarium*, ed. P. Wendland, CAG III 1, Berlin 1901.
- Broadie, S. and Rowe, C. (eds.), *Aristotle: Nicomachean Ethics*, Oxford 2002.
- Burnet, J., *The Ethics of Aristotle*, London 1900.
- Burnyeat, M. F., *The Theaetetus of Plato*, Indianapolis 1990.
- Cooper, J. M., *Reason and Human Good in Aristotle*, Indianapolis 1986.
- Corcilius, K. and Gregoric, R., 'Separability vs. Difference', *OSAP* 34 (2010), 81-119.
- Fine, G., 'Separation', *OSAP* 2 (1984), 31-87.
- Gauthier, A. and Jolif, J. Y. (eds.), *Aristote: L'Éthique à Nicomaque*, 2<sup>nd</sup> ed., 4 vols, Paris and Louvain 1970.
- Hamlyn, D. W. (ed.), *Aristotle De Anima, Books II and III*, Oxford 1968.
- Hicks, R. D. (ed.), *Aristotle De Anima*, Cambridge 1907 (*repr.* Arno Pr. 1976).
- Irwin, T. (ed.), *Aristotle: Nicomachean Ethics*, 2<sup>nd</sup> ed., Indianapolis 1999.
- Johansen, T. K., 'What's New in the *De Sensu*?', R. A. H. King (ed.), *Common to Body and Soul*, Berlin 2006, 140-64.
- Kahn, C. H., 'Aristotle on Thinking', in M. C. Nussbaum and A. O. Rorty (eds.), *Essays on Aristotle's De Anima*, Oxford 1992, 359-79.
- Kanayama, Y., 'Perceiving, Considering, and Attaining Being (*Theaetetus* 184-186)', *OSAP* 5 (1987), 29-81.
- 金子善彦「アリストテレスの思惟論再考」東京都立大学人文学部/首都大学東京人文・社会系紀要『人文学報』414号(2009年)1-55頁
- 「アリストテレスにおける個の認識」中川純男・田子山和歌子・金子善彦編『西洋哲学における「個」の概念』(慶應義塾大学言語文化研究所発行・2011年)11-52頁
- Modrak, D. K. W., *Aristotle: The Power of Perception*, Chicago and London, 1987.
- 中畑正志『自然主義の再検討(平成9~11年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書)』2000年
- 『魂の変容』(岩波書店・2011年)
- Philoponus, *In Libros Aristotelis De anima paraphrasis*, ed. M. Hayduck, CAG XV, Berlin 1897.
- Polansky, R., *Aristotle's De Anima*, Cambridge 2007.
- Reeve, C. D. C., *Aristotle on Practical Wisdom: Nicomachean Ethics VI*, Cambridge/Mass. 2013.
- Ross, W. D. (ed.), *Aristotle: Parva Naturalia*, Oxford 1955.
- Shields, C. (ed.), *Aristotle De Anima*, Oxford 2016.
- Themistius, *In Libros Aristotelis De anima paraphrasis*, ed. R. Heinze, CAG V 3, Berlin 1899.

———— R. B. Todd (tr.), *Themistius, on Aristotle on the Soul*, London 1996.

内山勝利・神崎繁・中畑正志編『アリストテレス全集 7——魂について・自然学小論集』  
(岩波書店・2014年)

渡辺邦夫「『魂について』における欲求と知性」茨城大学人文社会科学部紀要『人文  
コミュニケーション学論集』1号(2017年)133-60頁

渡辺邦夫訳『テアイテトス』(光文社古典新訳文庫・2019年)

渡辺邦夫・立花幸司訳『ニコマコス倫理学(下)』(光文社古典新訳文庫・2016年)

Wedin, M. V., *Mind and Imagination in Aristotle*, New Haven and London, 1988.